

上毛新聞（2009. 2. 1）

## 群馬音楽センターの将来は—市民と「ホール」考える 専門家招き公開講座 高崎市が来月まで4回

高崎市は、老朽化した群馬音楽センターの改修や建て替え、新ホール建設を市民とともに研究するため、文化行政や劇場運営、音響設計など各分野の専門家を招き「芸術・文化ホールを考える公開講座」を開く。本年度は2、3月に計4回開催、市民も無料で参加できる。ミュージカルで有名な劇団四季の劇場運営課長らを講師に迎え、魅力あるホールや劇場について学ぶ。

公開講座は2月12、20日、3月4、12日の計4回で、午後7時から同市高松町の群馬音楽センター会議室で開催する。

講師は各講座1人。芸術活動が盛んで公共ホールが整備されている金沢市の市文化交流部長の河原清さん（第1回）、ホールの音響設計では日本有数の永田音響設計プロジェクトチーフの小野朗さん（第2回）、大規模なリニューアルで成功した東京文化会館管理課の松葉昭憲さん（第3回）、四季劇場運営課長の山本吉彦さん（第4回）。それぞれ芸術文化ホールの建設や運営、文化行政などで成果を挙げている“仕事人”ばかりを集めた。

市文化課は「講師はいい人選ができた。講座に参加することで市民と職員がともに見識を高め、今後の芸術文化ホールの整備に役立てたい」としている。

1961年に建設された音楽センターはコンクリートの劣化などで、現状のまま使い続けるのは不可能。市は

- （1）補修して使用
- （2）解体して同じ場所に建て替え
- （3）残して新しいホールを建設

などを検討している。来年度にも音楽センターの詳しい調査を行い、改修や維持管理の方法を探り、コスト試算を行う考え。

また、市は本年度、新たな芸術文化ホールの整備について市民アンケートを行ったり、広報で音楽センターの特集を組んで意見を求めるなど、住民のニーズ把握に力を入れている。

上毛新聞（2009. 4. 8）

## 改修？新築？ 判断へコスト調査 群馬音楽センター

高崎市は本年度、群馬音楽センターの将来的な整備方針を定めるため、劣化している建物や音響、舞台装置などの診断調査を行う。市は老朽化に伴い、新たな芸術文化ホール建設も検討しているが、現段階では具体化していない。調査で判明する改修費のコスト試算を踏まえ、改修か新築かの判断材料にする考え。1961年に建設された同センターは2年後に半世紀を迎える。

◎高崎市 建物や音響診断

市は本年度当初予算に建物診断調査委託料として660万円を盛り込んだ。

市は整備の方向性として、

- (1) 現状維持で故障や劣化している箇所だけを修理
- (2) 最新設備のホールに全面改修
- (3) 同センターを改修し、同じ場所に新ホールを建設
- (4) 別の場所に新ホールを建設し、同センターは他用途で維持管理

などを検討している。

同センターは1992年の調査で建物本体のコンクリート劣化などが判明しており、現状のまま使い続けるのは不可能。さらに音響や舞台装置など設備面も老朽化している。最新設備を導入する全面改修の場合、建物本体の構造上、改修が制限される箇所が出てくる可能性がある。

現地建て替えの場合は2年程度かかり、群馬交響楽団の定期演奏会など数多くの催しを、他施設で行わなければならない。

同センターの取り壊しについて、建築的な価値から存続を求める声が強く、市は「解体しての建て替えは現実的に難しいのではないか」としている。

市は2006年、庁内組織「新芸術文化ホール建設検討委員会」を設置。新市基本計画に沿って2015年度までのホール整備を目指す。昨年度はホール整備で、市民アンケートを行ったり、広報で音楽センターの特集を組んで意見を求めるなど、住民のニーズ把握にも力を入れている。

市文化課は「(建設や改修の)コストを提示し、どの程度の施設になるかを示すことで、より踏み込んだ検討ができる」と話している。

上毛新聞(2009.6.7)

## 音楽センターの将来考える講座 宝塚歌劇団関係者ら迎え 26日から高崎市

高崎市は群馬音楽センターの改修や新ホール建設などを市民とともに研究するため、関係分野の専門家を招き「芸術・文化ホールを考える公開講座」を開く。本年度は文化政策が専門の大学教授と宝塚歌劇団のプロデューサーを講師に迎え、魅力あるホールや劇場について理解を深める。

公開講座の第1回(26日)は静岡文化芸術大文化政策学部の鈴木滉二郎教授が「都市におけるホールの役割」、第2回(7月8日)は阪急電鉄歌劇事業部公演事業担当プロデューサーの杉浦清志さんが「宝塚歌劇団の劇場について」をテーマにそれぞれ講演する。ともに午後7時から群馬音楽センター会議室で行われる。

市文化課によると、数年前に宝塚歌劇団の公演を群馬音楽センターで企画したが、同歌劇団側から音響や舞台装置などの問題点を指摘され実現しなかった経緯がある。

同課は「宝塚が見られるような芸術文化ホールの建設も一案。公開講座によって市民と職員がともに見識を高め、新ホール整備に役立てたい」と期待する。

上毛新聞（２００９． ９． ２２）

## **「ホール整備試金石」 街づくりでフォーラム 田中さんが持論 高崎**

高崎青年会議所は高崎市の高崎シティギャラリーで、「魅力ある都市に向けて」をテーマにしたＪＣフォーラムを開き、元ミュージア川崎シンフォニーホール総支配人の田中則之さんから講師が、群馬音楽センターや新たな芸術文化ホールの整備など高崎の街づくりについて語った。

元川崎市職員で現在は高崎市在住の田中さんは「高崎は群響というオーケストラをはぐくみ生かす宿命があり、芸術文化ホールの整備はその大きな試金石」と指摘。

「（新ホールは）『私』の願望や『公』の都合ではなく、市民１人ひとりが未来に責任の持てる選択をしなければならない」と持論を述べた。

上毛新聞（２００９． １２． １０）

## **改修では解決できず 音楽センター舞台機能や音響 高崎市が診断結果**

高崎市は、老朽化が進む群馬音楽センターの改修方法などを検討するために実施した建物診断調査（５月～１１月）の結果を公表し、「文化ホールとして不十分な舞台機能や音響は改修では解決できない」と総括した。

調査は同センターを設計したレーモンド設計事務所（東京都渋谷区）が実施。調査結果では、天井、床、壁が一体となった構造であり、建物本体の強度を低下させるような改修は不可能と指摘。そのため、改修には制限があり、舞台機能や音響の向上、バリアフリー、トイレ不足などの問題は解決が難しいとした。

市は結果を踏まえ、改修するか、新ホールを建設するかなどの方向性を検討、早ければ本年度中に整備案を決める方針だ。

上毛新聞（２０１０． ２． ４）

## **音楽センター改修は困難 場所移し新施設 市議会に提示整備室を新設 １５年度完成目指す 高崎市**

群馬音楽センターの建て替えを検討してきた高崎市は、音楽センターとは別に新たなコンサートホールを建設する方針を決め、整備案を３日の市議会総務常任委員会に示した。ＪＲ高崎駅周辺の公有地を活用する考え。２０１０年度中に基本構想を策定、合併特例債の利用期限となる１５年度の完成を目指す。完成後も音楽センターの施設を保存・活用するかどうかは、新ホールと切り離して検討する。

## 駅周辺の公有地活用

整備案は市内組織「芸術・コンサートホール建設検討プロジェクトチーム」（会長・曾根豊市長公室長）が作成。

- （１）音楽や演劇など幅広い用途に使用できる多目的ホール
- （２）群馬交響楽団など優れたクラシック音楽に対応可能
- （３）大ホールの規模は１８００～２０００席（音楽センターは１９３２席）

などを打ち出した。

市は新年度の機構改革で新ホール整備事業を担当する「都市集客施設整備室」を新設し、案をたたき台に市民意見を聞いた上で基本構想をまとめる。街づくりと絡めて建設場所を選定するほか、コンベンション施設の併設なども検討する。

建設場所は交通アクセスや経費節減面から、音楽センターに近いもてなし広場、ＪＲ高崎駅東口の栄町駐車場、競馬場跡地などが候補に挙がっている。

建設費は１００～１５０億円を見込む。合併特例債が対象事業費の９５％に充当でき、元利償還金の７０％が地方交付税によって措置されることから、特例債の利用期限である１５年度中の完成を目指す。

市は０７年度にプロジェクトチームを設置。全面改修か新ホールの建設かを検討してきた。本年度７カ月かけて建物の診断を実施した結果、音響や舞台設備の機能を高めたり、バリアフリー対策などの抜本的な改修を行うのは建物の構造上、困難なことが分かった。また、現在地での建て替えは、２～３年間、施設利用の空白期間が生じることからも難しいと判断した。

木部純二副市長は「市の理念である交流と創造のまちづくりを実現する魅力的な新ホールを、地域の活性化につながる最も適切な場所に建設したい」と話している。

群馬音楽センターは世界的建築家、アントニン・レーモンドが設計し、１９６１年に完成した。建て替えが検討されていることから、０８年６月に都内の建築士らが音楽センターの保存を求めて「群馬音楽センターを愛する会」を発足。開館５０周年となる１１年７月に、センターを客席数と同じ１９３２人の市民で取り囲む記念イベントを計画している。

音楽センター改修は困難

高崎市

場所移し新施設

市議会に提示  
整備室を新設  
15年度完成目指す

群馬音楽センターの建て替えを検討してきた高崎市は、音楽センターとは別に新たなコンサートホールを建設する方針を決め、整備案を3日の市議会総務常任委員会に示した。JR高崎駅周辺の公有地を活用する考え。2010年度中に基本構想を策定、合併特例債の利用期限となる15年度の完成を目指す。完成後も音楽センターの施設を保存・活用するかどうかは、新ホールと切り離して検討する。

駅周辺の公有地活用

整備案は市内組織「芸術・コンサートホール建設検討プロジェクトチーム」(会長・曾根豊市長公室長)が作成。①音楽や演劇など幅広い用途に使用できる多目的ホール②群馬交響楽団など優れたクラシック音楽に対応可能③大ホールの規模は1800〜2000席(音楽センターは1932席)などを打ち出した。

市は新年度の機構改革で新ホール整備事業を担当する「都市集客施設整備室」を新設し、案をたたき台に市民意見を聞いた上で基本構想をまとめる。街づくりと絡めて建設場所を選定するほか、コンベンション施設の併設なども検討する。建設場所は交通アクセスや経費節減面から、音楽センターに近いもてなし広

場、JR高崎駅東口の栄町駐車場、競馬場跡地などが候補に挙がっている。

建設費は100〜150億円を見込む。合併特例債が対象事業費の95%に充当でき、元利償還金の70%が地方交付税によって措置されることから、特例債の利用期限である15年度中の完成を目指す。

市は07年度にプロジェクトチームを設置。全面改修か新ホールの建設かを検討してきた。本年度、7カ月かけて建物の診断を実施した結果、音響や舞台設備の機能を高めたり、バリアフリー対策などの抜本的な改修を行うのは建物の構造上、困難なことが分かった。また、現在地での建て替えは、2〜3年間、施設利用

の空白期間が生じることからも難しいと判断した。

木部純二副市长は「市の理念である交流と創造のまちづくりを実現する魅力的な新ホールを、地域の活性化につながる最も適切な場所に建設したい」と話している。

群馬音楽センターは世界的建築家、アントニン・レイモンドが設計し、1961年に完成した。建て替えが検討されていることから、08年6月に都内の建築士らが音楽センターの保存を求めて「群馬音楽センターを愛する会」を発足。開館50周年となる11年7月に、センターを客席数と同じ1932人の市民で取り囲む記念イベントを計画している。